

昨年末富山房から編輯部の方が來られて、本辭典新裝版刊行の申出があつた。勿論否やいふべき筋ではないからその厚意を謝して、直に承諾の旨をお答へし、かねて心附いてゐた誤植の箇所を示してこれが訂正をお願いした。

本辭典の初版は大正四年から八年の間に完成したもので、四巻に分冊されてゐたが、昭和十四年修訂版刊行の時、五巻に分けた。分冊されてゐる辭書が、使用上幾多の不便があることは、辭書を引く者の等しく痛感するところであるから、今回の縮刷に當り、これを一冊に纏める計畫であると聞いたとき、双手を擧げて賛成したのである。比較的大部な辭書で一冊にまとめられたものは、恐らく本書が先頭を切つたことになるから、需要者諸賢と共に私の喜びとするところであり、地下の父も満足してゐると思ふ。

思へば父の一生は、本辭典の編纂に終始したといつても過言でない。その編纂を思ひ立つたのは、明治三十年頃であらうか。その第一着手は主として參考資料の蒐集であつて、購入し得るものは、乏しい月給の中から努めて買入れを行ひ、入手困難のものは、自分自ら又は寫字生を雇つて謄寫を行つた。父の藏書（今日は國立圖書館靜嘉堂文庫内に松井文庫として、一括收藏されてゐる）中、荒木田盛員の「鸚鵡抄」の稿本はじめ、字書や文法や方言、又は語源に關する本、特に古書の索引關係の書類が比較的多きを占めてゐるのは、この目的のための蒐集であつた。

そのうち富山房と金港堂との兩出版社が、共同で出版を引受けてくれることになつたので、ここに本格的に編纂事業が開始されたのである。これは當時の

出版界では、一社でこの出版を引受けるだけの資力がなかつた結果かとも思ふが、この間の事情は、よく分らない。又當時學習院の一教師にすぎなかつた父の信用だけでは、長期且巨額に上る編纂費を出してくれなかつたので、故上田萬年博士との共著といふことで、やうやく兩出版社の引受けを得たものであつたらしい。

明治三十六年私が十歳の時、原稿整理を手傳つた記憶があるから、恐らくこの頃から、發行書肆の編纂費の支給がはじまつたと思ふ。今私の眼の前には、父が「太平記」や「佩文韻府」や「史記」などに朱線を引いて、索引を作つてゐた姿が浮ぶ。明治三十七年の暮に、父は住居を牛込から小石川の目白臺に移したが、編輯所はこの邸内の離れ家に設けられた。

かくて十年の歲月を閲し、大正二年頃、やうやく原稿の一部が出来上り、印刷に附する運びとなつたが、最初に引受けた日清印刷株式會社（今の大日本印刷株式會社榎町工場）は、活字が足りなくなつて手を上げ、結局秀英社（今の大日本印刷の加賀町工場）が引受けることとなり、大正四年より八年にかけて、四巻が次々と刊行されて行つたが、この期間は私の一高から大学への時期に當り、私は主として第三校の校正を引受けて目を通した。

昭和八年に父は永年の教師生活を打ち切つたが、その晩年は序文にもある如く、實弟吉見謹三郎を助手にして、増補の事業に従つてゐた。然し富山房側の希望もあつて、まづ修訂版を出し、次いで増補巻を刊行することになつた。かくて昭和十四年十月に修訂版が発刊されたが、既にこの時は日華事變より太平

洋戦争への轉換を示す困難な情勢下にあつた。

増補巻を出すにつき、父は別に中辭典（辭鏡）と假稱の編纂を思ひ立ち、富山房の同意を得て、昭和十五年より再び編輯所を邸内に設けた。私も助手の一人として、増補並びに中辭典の編纂に従ひ、勤務の傍ら、ここに出勤した。

然るにわが國は太平洋戦争に突入して、用紙は極度に不足し、印刷所も軍に徵用されるもの多く、辭書の發行は殆んど望み薄となつた。

なほその上昭和十九年六月、四十年來住みなれた目白臺の住宅が、強制疎開により取拂ひの悲運に遭ひ、本辭典編纂の故地を去らなければならなかつたので、父は他の視る目にも悲痛な面持で、三女の婚嫁先なる淀橋戸塚へ移轉した。この移轉先へは、編纂の助力者樋口氏も翌二十年四月、その御住居が戦災により焼失したので、一時同居された。然るにこの移轉先も、やがて焼夷弾が見舞ひ、父の枕を離れる僅か四五寸のところへ天井を貫いて落下し、燃え出るといふ騒ぎが起り、遂に孫娘の假寓する栃木縣足尾に疎開するに至つた。

かくの如く昭和二十年には、原稿を手にする日も、途絶え勝ではあつたが、樋口氏より送られた原稿に、「二十年四月」と日附のあるものを見てゐるから、辭書の増補を完成したいといふ願望と努力とは、毫も衰へてゐなかつたらしい。ただ何ぶんにも八十三歳といふ頑齡と、戦時の榮養失調とは、その生命をこれ以上保たしめず、終戦の御詔勅を拜聴して、悲憤涕泣しつゝ、急に床より起てなくなり、十時間前に老衰で死亡した糟糠の妻の後を追つて、九月二十六日長逝した。

私は目白臺の家を疎開する時、父と別れて西落合へ居を求めたが、その際はほ完成してゐた中辭典を、樋口氏の御厚意によつて東洋文庫に寄託した。増補の原稿は自宅に引取つておいたが、空襲が激烈を極むるに至り、講談社にお願ひして、同社の倉庫に保管を委託した。かくて戸塚の父の寓居は焼け、私の家

も焼夷弾に見舞はれて一部罹災したが、二つの原稿は幸ひに戦災を免れ得たのである。

終戦後の混亂時代を目撃し、占領下の苦しい國民の生活を嘗めて、——辭書の出版の如きは未だ遠い先のことと考へてゐたが、今回富山房社長の英斷により、父の遺著が縮刷刊行されることとなつたのは、何よりの喜びであり、なほこの上は、晩年に心血をそそいだ増補を包含した新しい大辭典の出版と、中辭典の刊行とが、陽の目を見る日の來らんことを、衷心より願つて已まない。ここに本書刊行に至る經過の一端を記すと共に、父の生前に寄せられた前富山房社長坂本嘉治馬氏、及びその令息現社長守正氏の厚誼を深く感謝する次第である。

なほ本辭典の出版印刷については、編輯部の數納兵治氏、芳賀定氏、伊達豊氏、出版部の郡司直氏に一方ならぬ御配慮を賜つた。厚く御禮を申上げる。終りに、私にとつては、生涯の大半にツながりを持つ、本辭書の更生の姿を眼の前にして、感無量のものがあることを附け加へさせて頂きたい。

昭和二十七年九月

松 井 謙 識

製本大津

大正八年十月十五日 初版發行

昭和三年十月三日 修正版發行

昭和十四年二月二十八日 修訂版發行

昭和二十七年十一月八日 新裝版初版印刷

昭和二十七年十一月二十八日 新裝版初版發行

昭和二十八年三月二十五日 新裝版再版印刷

訂大日本國語辭典 新裝版
定價 金參千八百圓

著者 上田萬年

著者 松井簡治

發行者 合資會社 富山房
東京都千代田區神田保町一—三

右代表者 坂本守正

印刷者 單式印刷株式會社
東京都中野區橋場町四二

右代表者 森下笑吉

著者
檢印

發行所 合資會社

富山房

東京都千代田區神田保町一丁目三番地

電話神田(25)二二七—八
振替東京五四五二九

(定) 急公造紙

19844-52

本 文 用 紙
表 紙 ク ロ ー ス
裏 紙 背 皮
印 刷 本
製 本
三 菱 製 紙 株 式 會 社 中 川 工 場
日 本 ク ロ ー ス 工 業 株 式 會 社
淺 見 晃 庸 小 林 栄 一 郎
單 式 印 刷 株 式 會 社
大 津 印 刷 製 本 株 式 會 社
篠 崎 宗 治 製 本 工 場